

Chaucer の「数あそび」¹⁾

野 原 康 弘*

は じ め に

ここに一枚の絵（版画）の写真がある。絵の題は“CHAUCERS CANTERBURY PILGRIMS”となっている。そのタイトルにも表示されている Chaucer（以後チョーサーと表記）の代表作『カンタベリー物語』を題材にして描かれたカンタベリー詣の初日、早朝旅立ちの場面である。描いたのは William Blake（イギリス18世紀から19世紀にかけて活躍した画家、作家）である。そこに描かれている pilgrims すなわち巡礼の総人数は30人²⁾。数え間違いがないか、特に二重に数えてないかと注意しながら改めて数えてみる。やはり、30人。そのとき、遠くから誰かの声が聞こえてきたような気がした。

Heere folwen the wordes bitwene Chaucer and me.

（ここからチョーサーと私の会話が始まる）

「何をそんなにこだわっているのかね。」

「人数ですよ。この絵に描かれている巡礼の数です。ところであなたはどなたですか。」

「私は Geoffrey Chaucer という者だが。何を深刻に悩んでいるのかね。」

* 本学経営学部

キーワード：Chaucer, The Canterbury Tales, pilgrims

「あなたがチョーサーさんですか。実は、あなたが書いた「数」をめぐって一時は学者たちの間で大騒ぎの議論がなされたのですよ。今ではもう諦めてしまったようですが。」³⁾

「どの「数」のことを言っているのかね。」

「あなたがお書きになった『カンタベリー物語』の“General Prologe”，24行目です。この行にあなたは‘nyne and twenty’（「29」）と書いているのですが、覚えておられますか。」

「覚えていると言いたいが、もう600年以上も前のことだからね。」

「とにかく、あなたが記述した通りに書いてみますから思い出してくださいませんか。」

『カンタベリー物語』：120話の壮大な構想

At nyght was come into that hostelrye
Wel **nyne and twenty** in a compainye,
Of sondy folk, by aventure yfalle
In felaweshipe, and pilgrimmes were they alle,
That toward Caunterbury wolden ryde.

—“General Prologe” (ll. 23-27)

「チョーサーさん、私にこの5行をちょっと説明させてくれませんか。知らない人には何のことかまったく理解できないでしょうから。」

「説明？ 手短に頼むよ。」

「それでは遠慮なくやらせてもらいますよ。手短にできるかどうか自信はないのですが。」

この“General Prologe”の中での話なのですが、チョーサーさん、あな

たは春になってカンタベリーへのお参りを突然決心し、ロンドンのサザックというところにある「タバード」という宿屋に泊まることにしましたよね。夜になるとその宿屋に大勢の泊り客が団体でやって来た。団体といってもいろいろな（階級や職業の）人たちがいて、この宿屋で仲間と落ち合ったり、たまたまここで初めて居合わせた人たちもいたわけですね。その人たちは皆「カンタベリー詣」に出かける決意をして集合した巡礼たちです。あなたは**その総数が29人であったとわざわざ書き残しているのです。**

「このような説明で間違いありませんよね。あなたは宿屋にやってきた巡礼の一団の数を29人とはっきり書いているのですよ。この一団の中にあなた自身は含まれていないのですよね？」

「もちろん、含まれていないよ。それがどうかしたかね？ この巡礼たちの一団を見たときにちょっとした考えが浮かんでね。君は知らないと思うが、イタリアにボッカッチョという作家がいてね。」

「知っていますよ。『デカメロン』を書いた人でしょう。あなたがボッカッチョさんの作品の真似をしたという評判ですよ。」

「真似をしたなんてけしからん。当時はだな。」

「当時はともかく、なぜ29人というなんとも中途半端な数はなんですか？」

「そこに集まった巡礼が29人、そして私を含めれば30人。なんとも区切りの良い数ではないかね。そこで、宿の主人が次のような提案をおこなったわけだ。」

In this viage shal tell **tales tweye**
To Caunterbury-ward, I mene it so,
And homeward he shal tellen **othere two**,
Of adventures that whilom han bifalle.

—“Ibid.” (ll. 792-795)

「またまた、私の出番というわけですね。それでは解説しましょうか。」

「おいおい、ちょっと待ってくれ。これぐらいの英語なら誰でも理解できるのではないかな？」

「この4行は確かにそうですが、あなたが亡くなられてから英語それ自体も随分と変わりました。今ではもう tweyeなんて使いませんし、まあ、ここは私に任せてください。」

「なんとまあ、tweye が使われない？ あきれたものだ。」

「多少変化した twain という形で、古語として残ってはいますが。アメリカ人作家に Mark Twain という人もいますが。もちろんペンネームですけどね。」

「アメリカ？ Mark Twain？」

「余計なことを言ってしまったかな。」

チャーサーさんが先ほど言及した宿の主人というのは彼らが宿泊した「タバード」という宿屋の主人のこと。名前は Harry Bayley (l. 4358)。その主人が登場し、この巡礼の一団に向かって、「皆さん、カンタベリー詣の往路と復路に一人がそれぞれ2話ずつ物語をするというのはどうでしょうか。旅の退屈さも紛れますし、道中も愉快なものになりますよ。」と提案をしたわけです。この提案は全員の賛同を得て翌朝からさっそく実行に移されることになります。

「簡単に解説すればこんな感じでしょうか。」

「カンタベリーまでの往路に60話、カンタベリーからの復路に同じく60話、あわせて120話の物語が語られることになるわけだ。しかも物語の語

り手は多種多様。身分や階級も違うし、それにより教養の程度も違う。職業や性別も違うし、さらに出身地も違う。当然のことながら話す言葉も違う。語り手が紳士淑女ばかりの『デカメロン』とは大きく違う点さ。」

「そうですね。一団の Millere (『粉屋』) と Reve (『荘園管理人』) はあなたも指摘しているように、お互いをけなしあいながら二人とも分相応の下品な話をしていますよね。」

「下品だけど実に面白い話ではなかったかね。当時の庶民の生活がそのまま映し出されていて。」

「いや、本当に愉快な話でした。最初に話をした Knyght (『騎士』) の高尚な話とは随分違いましたね。」

「少しはわかってくれたかね。彼らの話したことを彼らの言葉でそのまま書いたからね。」

「作家としてのあなたの心を揺さぶるものがあつたわけですね。」

「勿論だよ。このようなさまざまな人物によって語られる120もの物語を聞くだけで終わってしまうなんてもったいない。必死で書き留めたものさ。」

「それが後の『カンタベリー物語』というわけですね。」

「最初はすべての話を集めたもので、総数120もの物話の壮大な集大成のはずだった。」

「実現していたらさぞ……。」

「それを言わないでくれよ。本当は私も残念だからね。書き始めたちやうどそのときに別の仕事が忙しくなってね。執筆に集中できなくなってしまったものだからね。」

「宿の主人、Harry さんを語り手として入れるおつもりはなかったのですか。なかなか面白い人物のようですからきっと楽しい物語をしてくれるのではないかと大いに期待していたのですが。」

「30人の団体ともなると、誰か一団を率いる人が必要になってくるものだよ。そこで宿屋の主人に進行役をやらせたわけさ。」

And for to make yow the moore mury,

I wol myselven goodly with yow ryde

Right at my owne coste, and to be youre gyde;

—“General Prologe” (ll. 802-804)

「それで主人は張り切っているのですね。翌日の早朝から皆を叩き起こし、この巡礼の一団を取り仕切り始めたわけですね。」

「それに彼は物語の優劣を決める審査役を自ら買って出ていたからね。審査員を物語の語り手に入れるわけにはいかないだろう。もし彼を語り手に入れて物語をさせたら、自分の話が一番よかったとしかねないよ。」

「良く分かりました。そしてあなたは巡礼道中の一部始終の描写に取り掛かることになるわけですね。」

「その通り。」

「ここで話を最初に戻してもよろしいですか。つまり、チョーサーさんはあなたと宿の主人を含めない巡礼の数を「29人」と数えたわけですね。ところがですね、一人ひとり数えていくとどうしても「29人」にはならないのです。どうなっているのですか。巡礼たちが一度にどっと入ってきたので数え間違えたとかありませんか。失礼な話ですが。」

「数え間違いだと！」

「私が言っているわけではありません。そのように主張する学者もいるのです。そんなにお怒りになるのであればここで一緒に一人ひとり数えてみませんか？」

本当に「29人」？

「もう一度、巡礼に出発する前の宿屋での場面に戻しましょう。チョーサーさん、あなたはこの巡礼の一团に加わることを決意した後、そのメンバーを詳しく観察して彼らの特徴を紹介していますよね。参加者の人数確認のため、実際にあなたの記述を追って人数を確認してみたいのですが。」

「馬鹿馬鹿しいが、やってみるか。」

「あなたは最初に、騎士のグループ3人を紹介していますね。」

「何事にも順序があって、高尚な騎士から始めるのは当時としてはまったく当然のことだったからね。従って最初に『騎士』自身。そして彼の実際の息子であり、父親に従い騎士道の修行中である『騎士見習い』。さらに騎士に同行した家来、『従者』。これで3人。」

1 番目：Knyght（騎士）

2 番目：Squier（騎士見習い）

3 番目：Yeman（従者）

「次は『尼僧院長』のグループですね。総勢5人（4番目から8番目まで）。まず『尼僧院長』。そしてその院長の巡礼に付き添い、身のまわりの世話する『尼僧』。さらに院長の道中の護衛にあたる『僧』たち3人。」

4 番目：Prioress（尼僧院長）

5 番目：Another Nonne（尼僧）

6 番目：preeste（僧）

7 番目：preeste（僧）

8 番目：preeste（僧）

「ここ “General Prologe” では 6 番， 7 番， 8 番の 3 人はまとめて ‘preestes thre’（3 人の僧）としか紹介されていませんね。なぜでしょうか？」

「“General Prologe”ではなく、他のところで詳しく説明しようと思ってそのままにしておいたのだよ。」

「そうですか。そのように主張している学者もいますが (Winny, p. 90)。」

「後で僧が道中に “The Nonnes Preestes Tale” という話をしたときに、（護衛に適した）頑強な体躯をした僧だと宿の主人に紹介をさせたはずだがね。」

「確かに、僧が一人話をし、人物の紹介もされています。しかし、3 人の僧のうち一人だけです。あとの二人の僧はどうしたのですか？」

「どうだったかな？ 思い出せないよ。随分昔のことだからね。」

「中には、あなたが後で人物紹介をしようとしていたが、すっかり忘れてしまったという学者もいるのですよ (Elliot, p. 4)。」

「『尼僧院長』の付き添いとして 3 人もの僧が必要であったのか議論になっているのです。それでなくても院長の世話係として尼さんが一人付き添っているのですから。」

「忘れた。忘れた。随分昔の……」

筆者の独り言：「気楽なもんだな。皆大騒ぎしたのに……」

「まあ次へ行きましょう。上の 5 人に続き、教会関係者をさらに二人紹介していますよね。まず『修道僧』。そして『托鉢僧』ですね。」

「教会の関係者は大事にしておかないと。」

9 番目：Monk（修道僧）

10番目：Frere（托鉢僧）

「前に述べた「3人の僧」の残りの2人の僧はこの『修道僧』と『托鉢僧』であると考えるのは無理でしょうか。」

「普通の僧と修道僧、托鉢僧とは違うだろう。」

「分かりました。次の11番目と12番目の2人は、あなたと同様、一人ずつこの詣でに参加した人たちを紹介してますね。紹介の仕方がなかなか面白いのですが。金儲けのことしか頭にない『貿易商』。それに学問のことしか頭にない『神学生』。この対照表現はあなたらしくてなかなか面白いですよ。」

11番目：Marchant（貿易商）

12番目：Clerk（神学生）

「そして次の13番目に『高等弁護士』、14番目に『地主』という2人が続けて紹介されています。『地主』は『高等弁護士』の知り合いで、彼の連れとしてこの詣に参加しているのですよね。」

13番目：Sergeant of the Law（高等弁護士）

14番目：Frankeleyn（地主）

「さあ、問題は次ですよ。」

「何が問題なのかね。」

「15番目から20番目までは総勢6人を紹介してますよね。この巡礼一団の中で最大グループです」。

15番目：Haberdasshere（小間物商）

16番目：Carpenter（大工）

17番目：Webbe（織物商）

18番目：Dyere（染物商）

19番目：Tapycer（つづれ織商）

20番目：Cook（料理人）

「15番から19番までの5人はある組合組織のメンバーで、こともあろうに彼らはわざわざ『料理人』まで同行させてのカンタベリー詣。彼らの羽振りの良さをひけらかしているなり上がり者たちさ。」

「この5人のメンバーはそれぞれの職業こそ紹介はされてはいるのですが、一人ひとりの詳しい記述はなされてないですね。」

「このような連中はあまり好きになれないものでね。彼らの奥さんまでが威張りくさっている。話をさせても、さぞ自分らの自慢話ばかりだろうよ。」

「だから彼らには話をさせなかったわけですか。なるほど、なるほど。」

「同行した『料理人』には物語をするチャンスを与えてやったわけだ。彼ら5人の悪口でも出てきたら面白いと思っていたのだが。」

「残念なことに彼の話は未完ですね。」

「この料理人ときたら、何を思ったのか宿の主人に関する話を始めたものだから、気になって、この主人の顔色をうかがっていたら、だんだん話が宿の主人の不都合な方向へと進みそうになってきたので打ち切ったというわけさ。料理人にはかわいそうなことをしたが、進行役のご機嫌を損ねると大変だからね。旅はまだまだこれからだったから。」

「私としても残念ですよ。せっかく面白くなってきたところだったので。失礼ですが、あなたがなさった“Sir Thopas”の話よりずっと面白かった

のですよ。」

「ウッ……。」

「正直に申したまでです。」

「…………（沈黙）。」

「あなたの怒りが静まるまで、一人で先を続けておきます。次の21番から23番は「タバード」宿屋でたまたま落ち合った巡礼たち。あなたと同じように一人でカンタベリー詣をしようとしていた人たちですよね。」

21番目：Shipman（船長）

22番目：Doctor of Phisik（医者）

23番目：Wif⁴⁾（Bath から来た主婦）

「まだ、お怒りはおさまらない。はい、次にいきましょうか。『教区牧師』と『農夫』の兄弟の二人連れ。信仰に厚く、まじめで素朴な二人の人物像が見えますよ。」

24番目：Persoun⁵⁾（教区牧師）

25番目：Plowman（農夫）

「チャーサーさん、そろそろ機嫌を直してくださいよ。この Plowman の後、あなたはちょっと気になる紹介の仕方をしているのです。」

Ther was also a Reve and a Millere,
A Somonour and a Pardoner also,
And a Maunciple, and myself—ther were namo.

—“General Prologe” (ll. 542-544)

「どうしてここでまとめて巡礼者を列挙したのですか。それまでは一人ひとり順番に紹介していたのに。」

「やはり私の助けが必要になるわけだ。言葉遣いには気をつけるように。」

「分かりました。それで教えてくださいよ。」

「そうだな，“General Prologue”が少々長くなりすぎて、巡礼が語る物語がなかなか始まらないので、いらいらしている人もいると思ってな。残り数人ですからもう少しご辛抱をといるところかな。」

「それではこちらも先を急ぎましょう。次に登場する『粉屋』と『荘園管理人』は実際に知り合いで、しかも犬猿の仲だったのですよね。それぞれ互いをけなすような物語をしているぐらいですからね。だから紹介のときも二人を続けて紹介するのではなく、二人の間に『食料仕入れ人』を一人はさんで紹介しているなんて、チャーサーさんの心憎い演出ですよ。」

26番目：Millere（粉屋）

27番目：Maunciple（食料仕入れ人）

28番目：Reve（荘園管理人）

「そうか、そうか。わかってくれたか。今まで誰も理解してくれなかった箇所だったのだが。」

筆者のひとりごと：「意外と単純なんだ、この人も。」

「何をぶつぶつ言ってるのかね。」

「いえいえ、何も。とにかく数の上ではもう残りは一人になりましたから、済ましてしましましょう。あなたのいう29人目となる最後の巡礼ですよ。」

29番目：Somonour（召喚人）：

「ほら、ちゃんと29人いたではないか。」

「はい、29人はちゃんといるのです、確かに。ところが、実はもう一人巡礼が残っているのです。」

「何だって、もう一人残っているって。いったい誰だ、そいつは。」

「Pardoner、『免罪符売り』ですよ。先ほども出てきたじゃないですか。」

30番目：Pardoner（免罪符売り）：

「何と忌々しい奴がまだ残っていたのか。免罪符など売って、たらふく儲けやがって。神を冒瀆するのものはなはだしい。こんなつまらない奴、削除してもかまわんよ。」

「そうはおっしゃられても、Pardoner は語り手として結構面白い話もしていますよ。語り手の一人を削除するわけにはいかないでしょう。いくらチョーサーさんが個人的に嫌いだと言っても。」

「それじゃ、私を入れなくても30人になってしまうではないか。」

「だから、皆大騒ぎをしているのですよ。」

「それは困ったことだな。」

「それはこっちの台詞ですよ。」

巡礼者は本当に30人？（Chaucer を含めずに）

「私も、チョーサーさんと同じように「巡礼を一人削除する」ことを考えてみましたよ。もし「30人」いる巡礼の中から一人を消すことができれば「29人」になるわけですからね。計算はいたも簡単ですが、いったい誰を消すかは至難の業ですよ。」

「その前の『召喚人』はどうかね。こいつも一般市民を食い物にしている悪い奴だから。」

「ところが彼も削除できないですよ。彼は「放屁を12等分する」という変な話をしているではないですか。あなたも“General Prologe”で彼を紹介しているのですよ、こっぴどくこき下ろしていますがね。しっかりしてくださいよ。」

「こき下ろしていたか。当然だな。」

「やはり“General Prologe”で一人ずつ具体的に紹介されている巡礼を削除するわけにはいかないでしょう。人数を一人削除するには私も賛成ですから、削除できそうな人たちを拾い上げて、そこから削除しても絶対に差し支えない巡礼を一人探し出しましょうよ。どうですか。」

「君にしてはなかなかの案だと思うが。」

「少々馬鹿にした褒めことばですが、まあ、ありがとうございます。さてと、ここで削除できる条件を確認しておきましょう。まずチョーサーさんが“General Prologe”で人物紹介をしていない人。さらに、語り手として登場しない人。この2点を満たす巡礼を見つけ出せば良いわけですね。」

「そうだね。でもそんな人いたかね。」

「やはり数人で参加したグループのメンバーから見つけ出すのが一番でしょう。もしこの中から本当はこの一団に参加していなかった人を見つげ出し、その人を30人から削除できれば「29人」になり問題はなくなります。簡単にはいきそうもないですよ。」

「ややこしそうだから君に任せるよ。頑張ってやってくれたまえ。」

「ちょっと、ちょっとチョーサーさん、聞いてくださいよ。個人で参加したり、二人で参加した人は全員、人物紹介がなされています。」

「彼らは削除の対象からはずれるわけだな。」

「その通りです。彼ら以外、3人、あるいはそれ以上のグループで参加

したのは三組だけです。1 番目から 3 番目の『騎士』の 3 人グループ。4 番目から 8 番目までの『尼僧院長』の 5 人グループ。最後に 15 番目から 20 番目の『職人衆』の 6 人グループ。」

「『騎士』のグループは 3 人とも紹介したはずだが。」

「そうですね、だから 3 人とも削除の対象からはずれます。」

「『尼僧院長』のグループはどうか。」

「すみません。簡単な方から先にやりませんか。」

「というと、『職人衆』のグループの方が簡単に済ませられるというのかね。」

「はい。6 人のうち『料理人』以外の 5 人は話し手となる機会を与えられていませんから、消去するための一つの条件は満たしています。しかしこの 5 人も一人ひとりの職業がきちんと明記されていますから消去のもう一つの条件を満たしていません。従って 6 人の内、誰かを消すことは不可能になります。」

「そうなると残るは『尼僧院長』のグループということだね。」

「そうですね、もし人数を減らせる可能性があるとしたらもうこのグループしかないことになります。」

「少しずつ思い出してきたよ。」

「そうですよ。あなたがすっかり思い出してくだされば、いとも簡単に片付くはずなのです。」

「言葉遣いに気をつけて！」

「そうでした。取り消します。」

「意外と素直だな。その態度を忘れずに！ そうすれば私も精一杯協力できるというものだよ。」

「分かりました。次に行ってよろしいでしょうか。」

「本当に分かってくれたのなら。」

「あなたは『尼僧院長』の付き添い連中について次のように書いています。」

Another Nonne with hire hadde she (Prioressse)⁶⁾

That was hir chapeleyne, and **preestes thre**.

—“General Prologe” (ll. 163-164)

「君の論理だと『尼僧院長』も『尼僧』も語り手として登場しているの
で省くわけにはいかないことになる。そうかな。」

「その通りです。この二人を省くのはまったく不可能です。」

「そうなると残りは3人の僧の中から一人を省くしかないというわけだ
な。」

「まさにその通りです。やはりほとんどの学者がここに注目しているの
ですよ。すなわち、164行目の‘preestes thre’という表現に。そのまま解
釈すると「3人の僧」となりますが、実際には僧は3人もいなかったの
ではと考えているのです。(Baugh (p. 241), Blake (p. 37), Davies (p. 78),
Elliot (p. 4) and etc.)」

「なるほど。」

「『尼僧院長』といえども、旅の世話役として『尼僧』が一人付き添っ
ているのだから、『僧』は3人も要らないですよ。(Blake (p. 37),
Cunningham (p. 61))」

「確かに、そう言われればそうだが。」

「学者の中には、この‘preestes thre’の‘**thre**’はあくまで前の163行の
‘she’と韻を踏ませるために単に使用されただけだと主張している者もい
ますがどうでしょうか。」

「どうだったかな。」

Chaucer の「数あそび」

「これもあなた独特の**数字の遊び**と私は考えているのですが。」

「……………（沈黙）。」

「実は別の箇所でも韻に関して同じような問題が生じているのです。といっても私が問題にしているだけで、他の学者は何も重要視していないところなのですが。良い機会ですからお聞きしてもよろしいでしょうか。」

「話がわき道に逸れるのではないかな。」

「確かに、多少逸れることにはなりますが、この3人（？）の僧の一人がした物語の中に出てくる押韻です。この質問によってあなたがこの僧たちのことを少しでも思い出してくれればと期待しているのですよ。」

「良からう。これも解決のための助けになるわけだね。」

倍数での遊び

「では早速。あなたの時代、倍数の表現方法は twice や thrice などの他にいくつか存在しましたよね。」

「たしかに、例えば、deal, fold, part, score などを頻繁に使用していた記憶があるがそれがどうかしたかね。」

「実は、今ではそれらのほとんどが廃語になり、fold さえも限られた表現だけの使用になってしまいました。」

「それはなんともさびしいことだ。私もよく使っていた times はどうなったかね。」

「その times が他の倍数表現を減ぼしたと言ってもよいほどです。」

「それで困ることはないのかね。」

「今日では散文が主流で押韻も使うことはほとんどありません。それでももし押韻を使う韻文で何かを書くとすれば不便さを感じるでしょうね。」

「語彙が乏しくなるのはなんとも嘆かわしいことだがね。」

「ところで、韻に関する倍数の問題というのはですね…………。」

「そうそう、そうであった。聞きたいことがあったのだな。」

「3人の僧の一人が面白い雄鶏の話をしました。彼の話の中での主人公、Chauntecleerはその鳴き声の美しさと時を告げる正確さでは国中どこを探しても右に出るものはいないという雄鶏の中の雄鶏でしたね。『僧』が物語を終えたとき、進行役の宿の主人は上機嫌で、その『僧』に声をかける場面がありますね。」

For if thou have corage as thou hast might,
Thee were need of hennes, as I wene,
Ya moo than **seven tymes seventene.**

—“The Nonnes Preestes Tale” (ll. 3452-3454)

「[あなたが俗人だったらさぞ優秀な雄鶏になるだろうよ。17の7倍もの雌鳥が必要になるはずだよ。]というところのことかね。」

「そうです。その箇所です。」

「それがどうかしたかね。」

「確かに、‘seven tymes seventeen’は「17の7倍」になるのですが、このままだと果して何の意味があるのですか。この箇所は「17の7倍」ではなくて、本当は「7の17倍」ではないだろうかとは私は思っています。どうでしょうか。」

「どういうことだね。」

「掛け算をすれば、「17の7倍」も「7の17倍」も、どちらも結果としては「119」という数になりますが、ここで「119」という数字に特別の意味があるとは思えないのです。」

「その通りだよ。「非常に多くの数」という意味で使っただけのことだからね。」

Chaucer の「数あそび」

「そうでしょう。この「119」という数よりもここでは「7」という数字の方が問題なのではないですか。宿の主人はこの筋骨逞しい僧を雄鶏にたとえました。それはその雄鶏 Chauntecleer が7羽の雌鳥を侍らせていたからでしょう。」

This gentil cok hadde in his governaunce

Seven hennes for to doon al his plesaunce,

—“Ibid.” (ll. 2865-2866)

「私が言いたいのは、上述3454行は、あなたとしては Ya moo than seventene tymes seven (「7羽の17倍」) としたかったのではないだろうかということです。しかし前行末の wene との押韻の関係で seven と seventene の順番を入れ替えることができなかったのではないのでしょうか。」

「当時、掛け算をできる人はそんなにいなかったし、百以上の数で厳密な数字の値を表現することもなかったし、その必要もなかったわけだ。」

「この掛け算で「119」という正確な数字を述べたかったわけではないということですね。」

「その通りだよ。この掛け算の答えを導き出すのではなく、この精力的な僧を鶏に例えたら、非常に多くの雌鳥が必要だということを言いたかったわけだよ、宿の主人は。」

「よく分かりました。話を3人の『僧』に戻しましょう。少しは記憶が戻ってきましたか。」

大胆な発想

「さて “General Prologe” では、‘preestes thre’ という記述以外、3人

の『僧』に関する記述はまったく何もないのです。」

「しかし Chauntecleer という雄鶏の話をしたのは『僧』だったはずだが。そうそう先ほど君も面白い話だったと認めていたではないか。」

「その通りです。だから3人とも全員削除するわけにはいかないことは確かです。すなわち、一人の僧は必ず残さなければならないのです。」

「なるほど、なるほど。」

「逆に言えば、何の紹介もされていなくて、かつ語り手としても登場しない残りの2人の僧の内、どちらか一人を削除できればよいことになります。」

「段々と的が絞られてきたわけだな。」

「でもここで問題が生じます。残された二人の僧のうち一人を消せば人数的にはうまく合わせることができますが、どちらの僧を消すべきか問題になります。」

「僧を一人消すと、僧は二人になるわけだな。」

「その通りです。僧を一人消すといっても、巡礼として参加していることすら怪しい二人の僧のどちらを削除したことになるのでしょうか。」

「どちらの僧だってかまわないじゃないか。どうせ名前もわからないというのであれば。」

「そのようなわけにはいきません。そのようにあいまいな消し方は。」

チョーサーさんがブツブツと独り言。「3人すべて消すのも駄目。そのうちの一人を消すのも駄目。となると……。」そして急に大きな声を張り上げた。

「それなら一度に2人の僧とも削除するというのはどうかね。」

「その通りです。初めて意見が一致しましたね。」

Chaucer の「数あそび」

「本当に君もそう考えていたのかね？ まあ君と意見が一致してもあまりうれしいとも感じないが。」

「しかしですね。」

「ほらまた、一度に二人消すとなると何か新たな問題が生じるというのだね。」

「そうですね。一人ではなく同時に二人を消すことになると、あなたを除く巡礼の数は「29人」ではなく、なんと「28人」になってしまいます。すなわち今度は一人不足してしまうのです。」

「そうだ、そうだ。思い出したぞ。それでちゃんと次の手を打っておいたはずだよ。」

「そうでしたか？」

巡礼の数の調整

「まあ、聞きたまえ。まず ‘Boghtoun under Blee’ という場所が出てくるところを見てほしいのだが。」

「カンタベリーに随分近づいた場所ですね。その日はロンドンを出発してもう4日目ですから (Wyatt, p. 9)。」

「この場所で二人の巡礼が我々の一団に追いついてきて合流させて欲しいと懇願する設定を考えるたわけだ。」

At Boghtoun under Blee us gan atake

A man that clothed was in clothes blake

—“The Prologe of Chanouns Yemannes Tale” (ll. 556-557)

「そうですね。A man というのが Chanoun で、彼は助手 Yeman を連れて二人だけで「カンタベリー詣」をしていたわけですね。」

The hors eek that **his yeman** rood upon
So swatte that unnethe myghte it gon.

—“Ibid.” (ll. 562-563)

「その通り。当時巡礼者が山賊に襲われる事件が横行していたことを考えれば二人だけの巡礼の旅は山賊には絶好の標的であり、極めて危険であったわけだ。山賊に身包み剥がされるくらいなら、見知らぬ集団に合流させてもらう方がずっと安心だし旅も楽しくなるからね。」

「でもそうするとまた問題が生じますよ。」

「次から次に問題、問題って嫌にならないかね。」

「そうはおっしゃられても、この二人が合流するとなると、巡礼の数は再び30人になり、元の本阿弥になってしまうでしょう。」

「そこで私は更なる策を練ったわけだ。つまりだ、この二人が口論を始めるように仕組んだのさ。この助手は常日頃から主人に対して大いに不満を抱いていたわけさ。それを一気に爆発させたものだから、主人は見知らぬ人たちの前ですっかり面目を失ってしまった。反抗する助手に激怒して、ついにはこの場を去って行くというわけだよ。」

But his Yeman wolde telle his pryvete,
He fledde away for verray sorwe and shame.

—“Ibid.” (ll. 701-702)

「結局 Yeman 一人だけがこの一団に加わることになったわけですね。数の上でうまく帳尻が合わされ、巡礼の総数もあなたも含めて30人になり、そのまま進めば物語の総数も120話になり、最初の構想も保たれたという分けですね。」

Chaucer の「数あそび」

「その通り。これでめでたし、めでたし。」

「こうなると120話の実現されなかったことが大いに悔やまれますよ。
せっかく『デカメロン』の100話を越えることができたのに。」
「それを言わないでくれないかね。」

お わ り に

「ところで、もう一つお尋ねしてもよろしいでしょうか。」
「また質問なのかね。この際だから聞いてみよう。」
「僧が一人だったということを示す決定的なものがあるのですよ。」
「ほお。」
「私は前に一度そのことについて書いたことがあるのですが全く注目されませんでしたよ。」
「それはどんなものだね。」
「私が注目したのはあなたの「冠詞」の使い方ですよ。」
「冠詞だって？ それが決定的な証拠だと言えるのかね。」
「次の箇所を見てほしいのですが。」

Thanne spak oure Hoost with rude speche and boold,
And seyde unto **the** Nonnes Preest anon,
“Com neer, thou preest, com hyder, thou sir John!
Telle us swich thyng as may oure hertes glade.

—“The Prologe of the Nonnes Preestes Tale” (ll. 2808-2811)

『『修道士』が『騎士』に話を途中で止められて、怒ってしまい、もうこれ以上話はしないと断言した後のところかな。』

「その通りです。宿の主人も別の話をするようお願いしたのですが、

断られたので気分を害してしまったのですね。」

「そうだったね。怒りでことばも少々乱暴になり別の巡礼に話を頼むことにしたわけだ。」

「そうです。宿の主人が次の語り手として選んだのが『僧』だったのです。問題は2808行の the Nonnes Preest の **the** という定冠詞です。」

「定冠詞？」

「もし僧が3人なら、そのうちの一人の僧に向かって話しかけると、普通は「定冠詞」を使うはずがないじゃないですか。」

「確かにその通りだよ。きっと oon of the thre Nonnes Preestes（3人の僧の一人）という表現を使うだろうな。」

「巡礼に参加した僧は一人しかいなかったから、定冠詞 the が使えたのですよ。そうは思いませんか。」

「なかなか良い着眼点だが、きっとまた君の主張に反論するものも出てくるだろうな。」

「そうですね。それはそれで楽しみですよ。」

「良い議論は本来面白いものだからね。」

「でもあなたの気まぐれ、失礼しました、「数字との戯れ」、というか「数字遊び」というか、そのおかげで随分振り回されましたね。」

「それも楽しんでくれれば良かったのだが。」

「私は十分楽しませてもらいましたよ。あなたとの会話も本当に楽しいものでした。」

「それは良かった。それでは、また。さらばじゃ。」

「ちょっと待ってください。ああ、行ってしまった。」

Heere is ended swich talkyng with Chaucer.

（ここにチョーサーとの話が終わる）

注

- 1) この論文は過去の2つの論文で触れたものを巡礼の人数だけに焦点を当て、新たな観点から書かれたものである。
- 2) William Blake は30人しか描いていない。作者のチョーサーも宿の主人のベイリーさんも含めて。Blake は Chaucer の『カンタベリー物語』に挿絵を描いたこともあるので、この本の内容は十分把握していたはずである。
- 3) この議論は今でも多少なりとも続いている。
- 4) “General Prologe” (l. 445) では、A good Wif was ther of biside Bathe と住んでいる場所が Bathe の近くであることが書かれている。
- 5) “General Prologe” (l. 478) では、a povre Persoun of a Toun と記述がある。
- 6) (Prioress) は、she が誰かをはっきりさせるために筆者が付加したものである。

参 考 文 献

- Alexander, M. 1986. *Prologue to the Canterbury Tales*, Longman, Harlow.
- Allen, M & Fischer, J. 2005. *The Complete Canterbury Tales of Geoffrey Chaucer*, Heinle & Heinle,
- Blake, N.F. 1980. *The Canterbury Tales*, Edward Arnold, New Jersey.
- Bloom, H. 2007. *Geoffrey Chaucer*, Bloom's Literary Criticism,
- Boccaccio, G. (柏熊達生 訳) 1963. *Decameron*, 河出書房新社, 東京
- Boitani, P. & Mann, A. 2003. *The Cambridge Companion to Chaucer*, Cambridge UP., Cambridge.
- Bradley, H. 1974. *A Middle English Dictionary*, The Clarendon Press, Oxford.
- Burgess, A. 1988. *The Riverside Chaucer*. Oxford UP., Oxford.
- Burley, D. 1983. *A Guide to Chaucer's Language*, Macmillan, London.
- Coghill, N. 2003. *The Canterbury Tales*, Penguin Classics, Harmondsworth.
- Cunningham, J. 1986. *The Prologue to the Canterbury Tales*, Richard Clay Ltd., Suffolk.
- Davies, R.T. 1953. *The Prologue to the Canterbury Tales*, Harrap, London.
- Davis, N. 1981. *A Chaucer Glossary*, The Clarendon Press, Oxford.
- Elliot, R.W.V. 1974. *Chaucer's English*, Andre Deutsch, London.

- Jimura, A. 2005. *Studies in Chaucer's Words and His Narratives*, Kenkyusha, Hiroshima.
- Kirkham, D. & Allen, V. 1999. *The General Prologue to the Canterbury Tales*, Cambridge UP., Cambridge.
- Mann, J. 2005. *The Canterbury Tales*, Penguin Classics,
- Nohara, Y. 1995. "Numerals in Chaucer" (「Chaucer における数詞」), 『英米評論』(第11号) 桃山学院大学紀要
- . 1996. "Numerals and Intensive Adverbs in Chaucer" (「Chaucer における数詞と強意副詞」) 『英米評論』(第12号) 桃山学院大学紀要
- Oizumi, A. 2003. *A Lexical Concordance to the Works of Geoffrey Chaucer*, G. Olms, Hildesheim.
- Persall, D. 1992. *The Canterbury Tales*, Everyman's Library, London.
- The Prologue to the Canterbury Tales*, 2005. York Notes, Longman, London.
- Robinson, F.N. 1974. *The Works of Geoffrey Chaucer*, Oxford UP., Oxford.
- Spearing, A.C. 1996. *The Knight's Tale*, Cambridge UP., Cambridge.
- Strange, J. 2000. *The Canterbury Tales*, Pearson Education, Harlow.
- Winny, J. 1969. *The General Prologue to the Canterbury Tales*, Cambridge UP., Cambridge.
- Wright, D. 1998. *The Canterbury Tales*, Oxford Paperbacks, Oxford.
- Wyatt, A.J. 1939. *The Links of The Canterbury Tales*, Sidgwick & Jackson Ltd., London.

Chaucer's Play On Numbers

Yasuhiro NOHARA

One spring in about 1387, Geoffrey Chaucer decided to go on a pilgrimage-journey to Canterbury and stayed at the Tabard Inn in London, where he met a motley group who were also going to visit St Thomas Shrine at Canterbury. Chaucer counted them and he wrote about the number of them as follows:

At nyght was come into that hostelrye
Wel **nyne and twenty** in a compainye,
Of sondry folk, by aventure yfalle
In felaweshipe, and pilgrimmes were they alle,
That toward Caunterbury wolden ryde.

—“General Prologe” (ll. 23–27)

The number of the pilgrims he counted was ‘**nyne and twenty**’ but the actual figure was ‘**thirty**’: the number cannot be made to fit the text. Why did this happen? Did Chaucer miscount them? There have once made many heated arguments on this disconcordance, which remains an open question. Although many of linguists studying Chaucer’s works have tried to solve this mystery including the author, none has given a convincing explanation yet.

In this paper, I am going to make another approach to this mystery of the number ‘**nyne and twenty**’.